

ヴィルヘルム時代の女性の娯楽文学 —ナタリー・フォン・エシュストルト『放蕩息子』(1902)を例に—

横山 香

はじめに

し控えているようだ。⁴

19世紀末から20世紀初頭、いわゆる「ヴィルヘルム時代」¹において、ドイツでは急速に社会の近代化・大衆化が進むなかで、娯楽雑誌・新聞が多数出版されるようになった。1868年には49タイトル(うち「女性向け」²は0)だった娯楽雑誌・新聞は、1898年には351タイトル(同135)、1909年には403タイトル(同186)と増加し、情報や娯楽を提供するメディアとして、一大市場を形成することになった³。これらの雑誌・新聞の一つの目玉が娯楽的な読み物、とりわけ連載長編小説であり、女性作家も多数活躍するようになった。だがその多くは忘れ去られ、ドイツ文学史においてはほとんど空白になっている。チューリッヒ文学館が2011/12年に開催したイベント「19世紀の女性作家たちI」の説明文には、次のように記されている。

1912年の当館の全目録(1835年の開館から1912年までに入手した全タイトルが記載されている)には、驚くほど多くの女性作家による文芸作品が記載されている—およそ600人の女性作家たちである! これらの女性の多くは、けっして文学界の周縁部や衆目の埒外で執筆していたわけではなく、センセーションを巻き起こし、実際にベストセラー作家となっていたのである。1900年から1905年にかけて、博物館協会〔注:チューリッヒ文学館の運営母体〕でもっとも読まれた作家のリストの第一位は、ナタリー・フォン・エシュストルトであった。誰が彼女のことをいまでも知っているだろうか? 彼女と同じく、この600人の女性作家らの大半は、今日では忘れ去られている。それはドイツ文学研究も同様で、女性研究やジェンダー研究を横目に、19世紀の書く女性たちには奇妙なほどほとんど関心を払わず、書庫に足を踏み入れることを差

ところが、この文学史上の空白にもかかわらず、女性の娯楽文学について、E・マルリット⁵とヘートヴィヒ・クルツ=マーラー⁶をこのジャンルの代表とする定型の言説が存在する。たとえば歴史家のトーマス・ニッパードは次のように述べる。

通俗文学を最初に特徴づけたのは「かの」マルリットである。[……] こういった小説は、おもに女性の読者に向けられていた。世界は、批判的に描かれた貴族と、市民層のあいだで動き、貧しい市民層の人々、すなわちシンデレラは、徳と働きと心根の高潔さによって、そして最後には、結婚して妻になることによって、苦しみから幸福へと上昇し、高貴な人間になることができるのである。女性は、どちらかというたしかに受動的であるが、理想主義的で感情豊かであり、家族に中心的な価値が置かれる。成果主義や実力者たちの世界といった父権的なヒエラルキーは、調和、感情、家庭での居心地の良さによって支えられる。その後、同様のもの(ただし貴族批判はない)が、ナタリー・フォン・エシュストルトや、他にも、1950年までに2900万部を売り上げたヘートヴィヒ・クルツ=マーラーといった作家らによって書かれる。それは夢による同一化と補償によって調和を目指す文学であり、〔既成の社会規範を肯定する〕合意の文学であり、そのなかにある経済や社会への批判は、「拝金主義」や個人の考え方に向けられることはあっても、資本所有制度そのものに向けられることはない。⁷

こういった女性の娯楽文学にたいする批判は、たしかに同時代においても存在した⁸。そしてこういった批判は後世に受け継がれた一方で、多くの女性作家たちとその作品は忘れ去られてしまった。

したがって、どのような作家が存在していて、どのような作品があったのか、まずはそれを掘り起こす作業が必要である。

それゆえ本稿では、女性の娯楽文学の代表的な書き手として名が挙げられるほどきわめて人気があったにもかかわらず、現在ではほとんど忘れ去られてしまったエシュストルトという作家と彼女の作品を取り上げ、とくに女性の登場人物に焦点を当て、上述の典型的な見方にたいし、実際のテキストを用いて検証したい。今回取り上げる作品は『放蕩息子』（*Der verlorene Sohn*⁹, 1902）で、彼女が人気作家としてもっとも名声を博していた時代に書かれたものである。もちろん、彼女の70編以上もあるうちの1作品でエシュストルトの全体像を提示できるわけではなく、ましてや当時の数多い他の女性作家たちをエシュストルトに代表させることも不可能に近いことであるが、文学史において忘れ去られ、消し去られた女性たちを再評価するための第一歩として試みる。

1. 作家について

ナタリー・フォン・エシュストルト（Natalie Auguste Karoline Amalia Hermine von Eschstruth）は1860年、ヘッセン選帝侯国（1866年にプロイセン王国に併合された後はヘッセン＝ナッサウ県）のホーフガイスマールに生まれた。父はヘッセン選帝侯国騎兵隊将校、後にプロイセン王国陸軍少佐であり、母は騎士領を所有する男爵家出身であった。スイス・ヌーシャテルの女子寄宿舎で学んだが、1885年からは、母親の病気のため、妹とともに実家で家政を司った。1890年にポンメルンの大地主を父に持つプロイセン王国陸軍少佐フランツ・フォン・クノーベルスドルフ＝ブレンケンホフ（Franz von Knobelsdorff-Brenkenhoff）と結婚し、「琴瑟相和」¹⁰の家庭生活で一男一女をもうけた。夫とともに駐屯地を転々とし、1903年の夫の死後はテブリッツ（テブリツェ）、ベルリン、シュヴェリーネと移り住んだ¹¹。メクレンブルク＝シュトレリッツのカロリーネ大公女や、メクレンブルク＝シュヴェリーネ大公のヨハン＝アルブレヒト夫妻とも親交があり、イプセンなど

数多くの作家や芸術家、上級貴族とも交流があった¹²。

子どもの頃から芸術的な教育を受け、歌唱、作曲、絵画の才能もあったという。12歳頃に、すでに詩誌 *Deutsche Dichtershalle* に詩を発表し、14歳頃には短編も出版している。結婚してからも執筆活動は続け、1939年に79歳で生を終えるまで、70作以上の詩、脚本、短編および長編小説を出版した¹³。

2. 『放蕩息子』のあらすじ

『放蕩息子』は1901年、女性向け娯楽新聞『ドイツ女性のための日曜新聞』（*Sonntags-Zeitung für Deutschlands Frauen*）におよそ5カ月にわたって連載されていた長編小説であり、1902年にバウル・リスト出版から単行本として発売された。

主人公はマルヴィーネ・フォン・リース、26歳独身。実家で家事をしている。退役軍人の父譲りの性格は、勤勉で律儀、冷静で厳格。人は彼女を「女の子の服を着た軍人」（I.）¹⁴と呼ぶ。母は、昇進できなかった夫と結婚が望めない娘を嘆いて暮らしている。

ある日、彼女は作曲家ヘルムート・ノヴァツァと出会い、演劇について語り合い、これまで抱いたことのない恋愛感情を知る。マルヴィーネは彼を王立劇場の総監督であるおじに引き合わせるが、そこでヘルムートは亡くなってしまう。葬儀の場で、ヘルムートの妹から、彼がイタリアで知り合った女性と婚約するつもりだったことを知る。利用されたことを知ったマルヴィーネは感情を封印し、ひたすら義務を果たして暮らし、45歳になったとき、彼女の評判を知った行政区長のフォン・アーベンスベルク伯爵から求婚される。彼は3年前に妻を亡くし、3人の子どもを抱えていた。伯爵はマルヴィーネには愛を求めず、養育者としてのみ期待する、そのための十分な見返りを与えると約束した。彼女は手に負えない子を養育するのが自分の義務だと考え、伯爵と結婚した。

3人の子どものうち長男で14歳のゲッツは、強制されることを嫌い、規律や常識に縛られた継母を軽蔑し、成年になると同時に家を出て、槍騎兵

隊に入隊する。父から十分な小遣いを貰い、賭け事や夜遊びなど自由な都会暮らしを満喫する。そしてサーカスで見かけた曲馬師のマドモアゼル・ルーを気に入り、自分だけではなく、彼女のギャンプルの借金を肩代わりし、再三法外な金額を父親にねだる。

それを知ったマルヴィーネは、ゲッツの更生は結婚しかないと考え、フラヴィア・フォン・フースビュという、孤児だが資産のある男爵令嬢を引き合わせようとする。しかしゲッツは継母の計画に憤り、相続権を放棄し、家を捨て、かねてからの夢であった曲馬師になるべくイギリスで修行する。しかし伯爵夫人の座を得たいルーの策謀により、ゲッツはイギリスで成功することができず、ドイツに戻ってやっと就職する。しかしミュンヘンのサーカスで芸を披露する日、彼にもはや相続権がないことを知ったルーが馬の鞍を切り裂き、彼は落馬して大けがをする。

落馬のけがで目が見えなくなったゲッツを搬送先の病院で手厚く看病したのは、シスター・マリアと名乗る看護人だった。彼女は彼に神の教えを説き、ゲッツの目が見えないという絶望は少しずつやわらぐ。彼は彼女に心を開いて、これまでの継母との確執を語る。

一方、ゲッツの弟クヴィリンは将来海軍に入隊するという夢があり、ボルシア・ボン学生団体¹⁵に入団しながらその時を待っている。妹のアナ=カトリーンは堅信札を受ける年頃になった。あるとき彼女が庭にいと、風に飛ばされた帽子を追いかけてきたグレゴール・フォン・ハウスマンと出会う。彼は最近街に来たばかりの地方裁判所の研修生で、実はヘルムートの甥であった。グレゴールは彼の母が持っていたヘルムートの手紙をマルヴィーネに渡す。そこには、ヘルムートから彼女へのプロポーズのことが書かれていた。彼女はこれまで心を閉ざし、義務として子育てをしてきたことを反省する。

そこにフラヴィアが訪ねて来る。彼女は亡き父の妹である未亡人のボルギウス枢密顧問官夫人とともに旅をしていた。フラヴィアはゲッツの悪い噂を聞き、彼の魂を救いたいと考えていた。探偵を雇ってゲッツを探し出し、二人でロンドンやミュ

ンヘンのサーカスに出向き、彼を見守っていたのであった。

フラヴィアは故郷へ戻り、ゲッツが事故でけがをして入院していること、退院してから援助が必要であることをマルヴィーネに話す。ゲッツの目はすでに見えるようになっていた。彼は、自分のもとを去ったシスター・マリアが実は若い女性だったことを知り、さらに想いを募らせていたが、同時に、無一文で帰る場所も仕事もない自分自身に絶望していた。そのときマルヴィーネが訪ねてくる。彼女はこれまでのことを悔いて、ゲッツに謝罪する。彼もこれまでの態度を反省し、二人は和解する。

自宅に戻ったゲッツは、父に頼んで、所有林の森林官として森の中で住み始める。マルヴィーネのとりなしで、彼はフラヴィアがシスター・マリアであることに気づき、告白し、二人は結ばれる。

アナ=カトリーンとグレゴールも結婚し、ゲッツとフラヴィアは父の死後に後継者となるまで森の中で暮らした。休む間もなく働く息子を、マルヴィーネは誇らしく見つめた。ゲッツは母親に、情熱や欲望を断ち切って初めて、真の、正しい自由が理解できると言うのであった。

3. 『放蕩息子』における女性たち

この作品にはおもに三人の女性が登場する。マルヴィーネ、ルー、フラヴィアである。

マルヴィーネはこの物語の主人公ではあるが、一般的に想像される女性向け娯楽小説のヒロイン像とはかけ離れている。背は高く、肩幅は広く、背筋をぴんと伸ばし、頭は心持ち大きく、グレーの瞳からは感情が読み取れない。小間使いを容赦なく叱りつける口で愛をささやくなど、ましてや甘いくちづけをするなど考えられない。彼女に、「叙情詩を読んだり、夕暮れ時の春の香りや月明りに夢中になったり、舞踏会のドレスにうっとりしたり、死んだ鳥に心を痛めたりする」(I.) ような《女の子らしい》感情があると誰も思っていない。ヘルムートとの出会いは彼女を変えたが、しかし彼の、後には誤解と分かる裏切りによってふたたび感情を封印することで、さらに厳格で近寄りが

たい女性となる。

だが、この性質が否定的に描かれているわけではない。ゲッツと和解し、子どもたちの「幸せと喜びを理解し、愚かさを寛大に許す、優しく、愛情深く、何でも分かってくれる母親」(XXV.)が真の母親であると知る結末は、一見、女性にとって必要なのは、軍人のように厳格な規律心や正義感ではないとも読める。しかしマルヴィーネが人々の尊敬を集め、伯爵に見込まれたのは、まさに彼女の公正さや律義さ、奉仕の心や心根の高潔さがあったからに他ならない。さらにいえば、ヘルムートがマルヴィーネを見初めたのも、彼女が一父からは墮落として禁じられていたが一おじから受け継いだ演劇の造詣があったことにもよる。マルヴィーネを規律心や正義感だけではなく、教養や芸術的素養、さらに愛情を備えた完璧な人物にすることで、作家の考える理想の女性が体現されているのである。

それと対照的なのは、ルーである。怠惰でギャンブル好きで、曲馬を極めるために練習する気もなく、コケティッシュな態度と派手なパフォーマンスで人気を得ているだけである¹⁶。手料理を作ったり、仮病でか弱い女性を演じてみたりと、あの手この手でゲッツを落とそうとする。玉の輿を狙っているだけだと冷静な目で彼女を見ていたゲッツすら、彼女が彼を本当に愛していると誤解するほどである。長子相続権に目を付け、さまざまな悪巧みをするが、物語の最後、ゲッツが読む新聞には、彼女が病気になる、詐欺で逮捕されたと報じられている。

ルーの描写で特徴的なのは、彼女のセクシュアリティを含めた欲望の表出である。ゲッツとルーとの関係は、彼女の誘惑にもかかわらずプラトニックであった。実のところルーも、彼の貴族的で気取った愛情表現が気に入らない。思い出すのはかつての恋人パウルである。彼女は彼を「情熱的に、野獣のように、食欲に愛した」(XIV.)。辛い仕事はしたくない、賭け事も止めたくない。節制がないため「28歳という年齢の割には太り気味」(XIV.)になった体が売りものにならなくなるまえに、裕福な結婚相手を見つけ、楽で贅沢な暮らしがしたい。彼女の、「欲しいのは体と指輪だけ」

(XIV.)と言い切るあけすけな願望は、当時の、とくに教養のある女性たちにとっては、口に出すのもはばかれるものであったであろう。しかし、ルーの心理描写やモノローグは、主人公であるマルヴィーネに比しても相当多く、ときには生き生きと描写されていることもあり、女性の読者たちは、彼女の願望や欲望の直截な表出に心中共感することもあったのではないだろうか。

しかしルーは失敗する。容姿や《女らしさ》や身体を武器にする生き方は、いずれ破滅する。この意味で、ルーはマルヴィーネと対極にある。

もう一人中心となる女性は、フラヴィアである。彼女は親戚のハイナウ伯爵夫人からひそかに「気難しい修道女」(XIII.)と呼ばれており、実際に彼女は両親の死後、女性執事になりたがっていた。結婚を愛情で結ばれるものという考えを持つ彼女は、「女性の名誉と尊厳を踏みにじる」(XIII.)ゲッツのような男と契約結婚するよりも、ペストの患者を一人でも救いたい。しかし彼女がゲッツのその「美しく誇り高い顔」(XIII.)の写真を見た途端、神から「危機に瀕した魂を見守る使命」(XXIV.)を与えられたように感じる。この使命を果たすために、彼女は驚くべき行動力を発揮する。それは信仰心からだけではなく、不器用で世間馴れしていない男爵家の孤児が、「女たちが放っておくはずがない」(XIII.)ライバル数多のゲッツ伯爵との見合いを決断するという、その意外な大胆さがあったからである。そして結局夫婦間では愛がなかった義母マルヴィーネとは異なり、彼女はロマンチック・ラブを成就させ、幸福な家庭を持つことになる。

以上、『放蕩息子』に描かれた女性たちを見てきたが、彼女たちはけっしてたんなる受動的な存在ではなく、さまざまに考え、悩み、ときに大胆に行動し、(ルーは失敗に終わるが)自ら運命を変えていく人物として描かれている。たしかに作中、女性は男性に選ばれ、結婚をつうじて幸福になれるというシンデレラストoryが否定されることはない。これは後のフェミニズム批評から批判される点ではあるが、結婚が女性にとって、幸福や生活の保障のためにきわめて重要な事柄であった当時の社会的状況を考慮する必要はあるだ

ろう。

さらにいえば、物語のなかの幸福な結婚は、その当時の現実の結婚生活¹⁷のたんなる再現ではない。ゲッツはそもそも裕福な貴族で容姿端麗だが、もしギャンブル好きで怠け者のままであったなら、フラヴィアが彼と結婚することなどなかったであろう。辛い出来事を経験し、献身によって更生し、愛する妻と堅実な生活を送るゲッツでなければ、ヒーローになる資格はない。ここで描かれる結婚は、もはやファンタジーの領域なのである。女性の娯楽文学は現実を描かないという批判は、それを求める読者にとっては的外れである。なぜならファンタジーは、現実を生きるためのエンパワーメントとなり得るものなのだから。

おわりに

娯楽文学は、その時代の読者に宛てて書かれるという特性から、テーマにしても道德観にしても、あるいは表現や文体も、時が過ぎると時代に合わなくなってしまうことも多い。

『放蕩息子』においては、マルヴィーネの律儀で厳格な性格と、それを是とする作家の姿勢はかなり「プロイセン的」¹⁸であるし、ゲッツの弟クヴィリンの学生団体や海軍入隊など、ヴィルヘルム時代の帝国主義的な思想を感じる部分もある¹⁹。物語中キーワードになる長子相続権などもいまでは理解しづらい。

一方で、あり得ない偶然、病気や死、策略や悪巧みなどが次々に生じるストーリー展開や、琴線に触れる感情描写など、十分な娯楽性もある。エシュストルトの名前が受け継がれずに消えてしまったのにはさまざまな理由があるだろうが、ドイツにおいて娯楽作品を娯楽作品として正当に評価するシステム自体が発展してこなかったことも、一つの理由としてあるのではないだろうか。今後、彼女の「同僚たち」「後継者たち」の掘り起こしを進めながら、この問題についても考えていきたい。

本稿は、科学研究費助成事業・基盤研究 C「ドイツ帝政期の女性作家による娯楽文学の諸相」

(23K00434) の助成を受けたものである。

【注】

以下 URL の最終閲覧日は、すべて 2024 年 12 月 31 日。

- 1 「ヴィルヘルム時代」とは一般的に、第 3 代ドイツ皇帝ヴィルヘルム 2 世在位期間 (1888 年 6 月 15 日—1918 年 11 月 9 日) のうち、「鉄血宰相」と呼ばれたビスマルクが皇帝と衝突して辞任した 1890 年以降から、第一次世界大戦中に影響力が弱まっていった頃まで、もしくは 1918 年 11 月 9 日の退位までの時代を指す。
- 2 Graf の資料では、Frauen-, Haus-, Modeblätter が「女性向け雑誌・新聞」(Frauenblätter) として分類されている。Graf, Andreas: Die Ursprünge der modernen Medienindustrie: Familien- und Unterhaltungszeitschriften der Kaiserzeit (1870-1918), 2009, S. 5.
(<https://www.yumpu.com/de/document/read/3743888/familien-und-unterhaltungszeitschriften-der-kaiserzeit-1870-1918>)
- 3 Ebd.
- 4 Literaturhaus Zürich: *Schriftstellerinnen des 19. Jahrhunderts. Die Romantikerinnen – Teil 1.* (<https://literaturhaus.ch/ausstellungen/>)
- 5 E. Marlitt (Eugenie John Marlitt, 1825-87) は 19 世紀後半に人気を博した家庭雑誌 *Die Gartenlaube* に執筆していた作家で、女性の娯楽文学作家の代名詞となっている。詳細は、竹田和子「E・マルリット作品に描かれた「家」の崩壊とその社会的背景—商業顧問官の家」と『石榴石の髪飾りの女』を中心に—」阪神ドイツ文学会『ドイツ文学論攷』61、2019 年、5—27 ページ等を参照。
- 6 Hedwig Courths-Mahler (1867-1950) は 20 世紀初頭から戦後しばらくまできわめて人気が高かった作家だが、通俗小説の代名詞として否定的に言及されることが多い。
- 7 Nipperdey, Thomas: *Deutsche Geschichte 1866-1918 Bd. 1: Arbeitswelt und Bürgergeist*, München: C. H. Beck, 1990, S. 757. 引用は私訳であるが、以下の翻訳を参照した。トーマス・ニッパードイ (大内宏一訳)『ドイツ史 1866-1918 労働世界と市民精神 (下)』白水社、2023 年、426 ページ。
- 8 1900 年頃の公共図書館の一部では、貸本屋では人気が高かったエシュストルトやマルリットを図書館で貸し出すべきかという議論があり、彼女たちの本を排除した図書館もあった。Jäger, Georg und Rudek, Valeska: Die deutschen Leihbibliotheken zwischen 1860 und 1914/18. Analyse der Funktionskrise und Statistik der Bestände. In: Dimpfl, Monika und Jäger, Georg (Hrsg.): *Zur Sozialgeschichte der deutschen Literatur im 19. Jahrhundert. Einzelstudien. Teil II*, S. 199-295, hier S. 228-229.
- 9 「放蕩息子」は『新約聖書』の「ルカによる福音書」(15 章 11—32 節) でイエス・キリストが語るたとえ話である。絵画、演劇、文学などの分野で数多くの翻案作品があるが、本作品では以下の「あらすじ」にあるとおり、父親 (神)・兄 (法に忠実な人間)・弟 (罪人) といった定型は用いられておらず、現代的・世俗的な形で翻案であると考えられる。

- 10 Pataky, Sophie: Nataly von Knobelsdorff-Brenkenhoff. In: dies., *Lexikon deutscher Frauen der Feder: eine Zusammenstellung der seit dem Jahr 1840 erschienenen Werke weiblicher Autoren nebst Biographien der lebenden und einem Verzeichnis der Pseudonyme (Band 1): A – L*. Berlin: Verlagsbuchhandlung Carl Pataky, 1898, S. 438-439. [Online-Version]
(<https://digi.ub.uni-heidelberg.de/diglit/pataky1898bd1/0456/image,info>)
- 11 Wikipedia: Nataly von Eschstruth
(https://de.wikipedia.org/wiki/Nataly_von_Eschstruth)
- 12 Petzsch, Christoph: Eschstruth, Nataly von. In: *Neue Deutsche Biographie 4*. Berlin: Duncker & Humblot, 1959, S. 651-652. [Online-Version]
(<https://www.deutschebiographie.de/pnd116569549.html#ndbcontent>)
- 13 Pataky, a. a. O.
- 14 以下、直接引用には電子書籍「楽天 Kobo」版 (Otbebookpublishing, 2021) の章番号を記す。
- 15 ボルシア・ボン学生団体 (Corps Borussia Bonn) は1821年にボン大学の学生によって設立された団体。ヴィルヘルム 2 世もかつては所属し、プロイセンや他の王家の子息も多く入団していた。
- 16 当時の女曲馬師は、鍛錬して芸を極めるアーティストとして認められる一方で、いわゆる芸能スターとして、貴族や高官などがパトロンとなり、スキヤンダルもあった (エルンスト・ギュンター (尾崎宏次訳) 『女曲馬師の死』草風館、1997 年、46 ページ参照)。ただし芸能スターとして、出自と関係なく結婚による社会的身分の上昇は可能であったという。Teller, Katalin: *Artistinnen in der Zirkusgeschichte* (übersetzt von Rétháti, Sandra), Goethe-Institut Ungarn, 2019.
(<https://www.goethe.de/ins/hu/de/kul/sup/fre/21680118.html>)
- 17 ドイツ帝国時代において、女性の平等や権利は保証されておらず、家父長的家族制度のなかで、女性の役割は妻として母親としての役割を果たすことであったと一般的に言われている。ただし、こういった見方にたいし、最近では歴史学においても再検証が進んできている。Augstein, Rudolf (Hrsg.): *Spiegel Geschichte 6. Leben im Kaiserreich. Zwischen Pickelhaube und Aufbruch: Deutschland unter den Hohenzollern*. Hamburg: Spiegel Verlag, 2022, とくに S. 36-40 参照。
- 18 「プロイセン的」 (preußisch) とは、「《プロイセン的な美德》に合っている。非常に秩序正しい、義務感がある、信頼できる、つましい、勤勉である。」 (Wiktionary. de „preußisch“.
<https://de.wiktionary.org/wiki/preußisch>)
- 19 ヴィルヘルム 2 世はドイツ帝国の世界進出を目論み、帝国海軍 (1872-1918) の増強を熱望した。